「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

ヨーロッパ日本研究学術交流会議

緊急会議　**After/With** コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義

趣意書

「国際日本研究」コンソーシアム（URL: https://cgjs.jp/　幹事機関・事務局は国際日本文化研究センター）は、「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げる大学院や研究所など、国内の研究・教育機関と相互に連携を図りながら、「国際日本研究」という研究分野の共同的・横断的推進と、教育体制の実践を目指す先駆的な試みとして、2017 年 9 月に正式に発足しました。「国際日本研究」に関わる共同研究会や国際研究集会の企画あるいは参加を促進し、また本コンソーシアムを媒介としながら、国内研究者コミュニティを海外研究者ネットワークと結びつけることを目指しています。

昨年度より、コンソーシアムのより広い海外展開を目指して、会員機関と協働しつつ、国際学術交流会議の試みを開始しました。その始発として、2019 年には、地域の視界を「環太平洋」に定め、インドネシア・オーストラリア・ニュージーランド・ハワイなどから研究者を招き、「環太平洋学術交流会議」を開催しました。

本来、ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）国際会議の開催年度であった 2020 年度には、その対象をヨーロッパに置き、「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」の開催を計画してまいりました。ただし 2019 年末から 2020 年以降、コロナ禍により、多くの国内外の学術会議が中止や延期となりました。本企画につきましても、開催時期・方法・テーマなどについて根本からの見直しを迫られましたが、数ヶ月の議論を重ね、ようやく新たな形での開催を推進する次第となりました。

＊＊

「国際日本研究」は、そして本コンソーシアムは、この時代のこのような状況下で、いかなる学術的展望を見出すことができるのか。国際的なコンソーシアムの研究連携の未来にはどのような可能性があるのか。まさに After/With コロナの今こそ、新たな学術形態の模索・開発、そして教育交流の構想・進展・議論をすべき時期であると考えます。

EAJS の国際会議は、早々に来年同時期の開催へと延期が決まり、すでに刷新された告知が出ています。そして EAJS ウェブサイトにも掲載されているように、本コンソーシアムの幹事を務める国際日本文化研究センターは、EAJS のイベントとしてシンポジウムを開催します。またそれと連続して本コンソーシアムでも、若手のワークショップを企画・開催する予定となっています。

そこで、日本研究の国際学術交流会議を、本年度、当初の企画通りヨーロッパを対象として行うこととしたいと考えました。国際日本文化研究センターの連携機関や「国際日本研究」コンソーシアムに関連する研究機関を基盤として、国内外でご活躍の研究者をお招きし、「緊急会議」として「After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」を提言するオンラインシンポジウム（原則として）を開催したいと思います。

＊＊

基調講演者として、ポストコロナについても広い視野から提言と考察を行っておられる、五百籏頭眞氏（公立大学法人兵庫県立大学理事長）をお招きし、シンポジウムへと繋げていきたいと考えております。

プログラム

12 / 11（金）

進行： 荒木 浩（「国際日本研究」コンソーシアム委員会委員長・国際日本文化研究センター教授）

17:00-17:10 開会の挨拶： 井上 章一（国際日本文化研究センター所長）

17:10-17:20 趣旨説明： 荒木 浩

17:20-18:30 基調講演： 五百籏頭 眞（公立大学法人兵庫県立大学理事長）

司会： 楠 綾子（国際日本文化研究センター准教授）

18:45-19:20 基調報告： 関野 樹（国際日本文化研究センター教授）

司会： 山田 奨治（国際日本文化研究センター教授）

12 / 12（土）

進行： 荒木 浩

17:00-20:30 パネル発表「ヨーロッパからの報告（1）」

パネリスト：

① エドアルド・ジェルリーニ（ヴェネツィア大学）

② 佐藤＝ロスベアグ・ナナ（ロンドン大学 SOAS）

③ 鋳物 美佳（ストラスブール大学）

④ アンドレアス・ニーハウス（ゲント大学）

⑤ マルクス・リュッターマン（国際日本文化研究センター教授）

ディスカッサント： 白石 恵理（国際日本文化研究センター助教）

司会： 安井 眞奈美（国際日本文化研究センター教授）

12 / 13（日）

進行： 荒木 浩

17:00-20:15 パネル発表「ヨーロッパからの報告（2）」

パネリスト：

⑥ アラン・カミングス（ロンドン大学 SOAS）

⑦ 豊沢 信子（チェコ科学アカデミー）

⑧ 梅村 裕子（ブダペスト大学 [ELTE]）

⑨ ビョーン＝オーレ・カム（京都大学）

ディスカッサント：

キリ・パラモア（ユニバーシティ・カレッジ・コーク）

藤本 憲正（国際日本文化研究センター機関研究員）

司会： ジョン・ブリーン（国際日本文化研究センター教授）

20:15-21:00 総合討論 司会： 荒木 浩

21:00-21:10 閉会の挨拶： 瀧井 一博（国際日本文化研究センター副所長）

【12/11（金）基調講演】

五百籏頭　眞（いおきべ　まこと）
（兵庫県立大学理事長）

【専門】
日本政治外交史・政策過程論・日米関係論

【学歴・学位】
1967 年 03 月　京都大学法学部　卒業
1969 年 03 月　京都大学大学院法学研究科修士課程　修了（政治学専攻）
1987 年 03 月　法学博士（京都大学）

【職歴】
1981 年 10 月　神戸大学法学部教授（2006 年 07 月まで）神戸大学名誉教授
2006 年 08 月　防衛大学校校長（2012 年 03 月まで）防衛大学校名誉教授
2011 年　　文化功労者
2012 年 04 月　公立大学法人熊本県立大学理事長（2018 年 03 月まで）熊本県立大学特別栄誉教授
2012 年 04 月　公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構理事長（現在に至る）
2018 年 04 月　公立大学法人兵庫県立大学理事長（現在に至る）

【著書】
「日本政治外交史」（NHK 出版 1984）
「米国の日本占領政策-戦後日本の設計図」（中央公論社 1985 年）
「日米戦争と戦後日本」（大阪書籍 1989 年）
「秩序変革期の日本の選択」（PHP 研究所 1991 年）
「占領期-首相たちの新日本」（読売新聞社 1997 年）
「アジア型のリーダーシップと国家形成～」（編著、TBS ブリタニカ 1998 年）
「戦後日本外交史」（編著、有斐閣 1999 年）吉田茂賞
「日本の近代 6 戦争・占領・講和-1941-1955」（中央公論新社 2001 年）
「歴史としての現代日本-五百旗頭真書評集成」（千倉書房 2008 年）
「NHK さかのぼり 日本史①戦後 経済大国の"漂流"」（NHK 出版 2011 年）
「大震災復興過程の政策比較分析」（監修、ミネルヴァ書房 2016 年）
「大災害の時代　未来の国難に備えて」（毎日新聞出版 2016 年）

【題目】

「コロナ後の国際関係」

【要旨】

細菌やウイルスによる感染症は、長く人類史と共にあったが、20 世紀にはその多くがワクチンや抗生物質などの薬剤開発によりほぼ抑制されるに至った。そんな中、なお制御し難いのが変異を得意とする A 型インフルエンザのウイルスである。第一次大戦末期に流行した米国発の（A 型ウイルスによる通称）スペイン風邪と今回のコロナが、近現代の二大パンデミックである。

百年前のスペイン風邪は、皮肉なことに、大戦の休戦を後押しすることになった。戦死者合計約1千万に加えて、感染症でその数倍の死者を出したのでは、いずれの交戦国も国内が持たない事態となったからである。

米中関係はかねて険悪化していたが、武漢発コロナ拡散とともにトランプ政権は中国を罵倒し、習近平政権は香港・ウイグルと南シナ海への支配強化をもって応酬した。百年前とは逆に、国際政治はいっそう荒れすさむ。だが、コロナは人間の生存への挑戦であり、国家対立によって解決できない。「人間の安全保障」観に立脚した人類の共同対処が不可欠ではないだろうか。

【12/11（金）基調報告】

関野　樹（せきの　たつき）
（国際日本文化研究センター教授）

【専門】

情報学

【学歴・学位】

1991 年 03 月　信州大学 理学部 生物学科　卒業
1993 年 03 月　信州大学大学院 理学研究科 修士課程　修了
1998 年 09 月　京都大学大学院 理学研究科 博士後期課程　修了

【職歴】

1999 年 04 月　京都大学生態学研究センター 講師（中核的研究機関研究員）
2001 年 04 月　（財）国際湖沼環境委員会 研究員
2002 年 03 月　総合地球環境学研究所 助教授
2007 年 04 月　総合地球環境学研究所 准教授
2016 年 01 月　総合地球環境学研究所 教授
2018 年 07 月　国際日本文化研究センター 総合情報発信室 教授

【論文】

- 2019-12 関野 樹. 時間名による時間参照基盤の構築－Linked Data を用いた期間の記述とリソース化. 情報処理学会シンポジウムシリーズ じんもんこん 2019 論文集 pp.267-272.
- 2020-02 Tatsuki Sekino. 'Data description and retrieval using periods represented by uncertain time intervals'. *Journal of Information Processing* 28:91-99. doi:10.2197/ipsjjip.28.91
- 2020-07 Tatsuki Sekino. 'Time Information System, HuTime - A Visualization and Analysis Tool for Chronological Information of Humanities'. *Proceedings of Digital Humanities Conference* 2020 (DH2020).

【題目】

「人文学研究におけるオンライン上の研究資源―現状と課題」

【要旨】

COVID-19 の拡大に伴う移動制限により、研究者コミュニティにおいても、インターネットなどのオンライン環境を活用するための模索が続いている。従来の対面によるコミュニケーションをいかにして電子会議システムなどで代用するかという課題が新たに浮上する一方で、データベースなどを通じて公開される史資料などの研究資源をいかに拡充し、活用するかという課題も、従前からのさまざまな議論や取り組みが改めて再認識されている。

日本研究を含む人文学研究において、研究資源の電子化やデータベースの公開は、遠隔地にある史資料などを居ながらにして閲覧することを目的としたものであった。しかしながら現在では、AI の学習用データとしての利用や IIIF を活用した二次的なコンテンツの開発など、その利活用は多様化している。さらに研究資源の構築段階においても、史資料の翻刻や情報抽出などをオンラインで共同作業する試みがある。今後も、オンライン上の研究資源の利活用はさらに多様化し、異分野からの参入も増えると想像される。こうした状況を踏まえ、研究資源の提供者として、また、研究資源を通じた異分野交流の中核として、研究者コミュニティの役割が問われている。

【12/12(土)パネル発表　パネリスト】

エドアルド・ジェルリーニ

(ヴェネツィア・カフォスカリ大学アジア・北アフリカ学部「マリー・スクォドフスカ＝キュリー」フェロー)

【専門】

Japanese premodern literature of the early Heian period (9th century), with a focus on Chinese poetry, canon formation, and concepts of cultural heritage.

【学歴・学位】

2011　Ph.D. in East Asian Studies, Doctoral School of Languages, Cultures, Societies, XXIII cycle, "Ca' Foscari" University of Venice.
2006　Bachelor degree in Foreign Languages and Literatures (Japanese and Chinese), Università degli Studi di Firenze.

【職歴】

a.a 2018-2021　"Marie Sklodowska-Curie Action" fellow, Global Fellowship. Ca' Foscari University of Venice. Title of the project: "World Heritage and East Asian Literature – Sinitic Writings in Japan as Cultural Heritage". Supervisor: Prof. Bonaventura Ruperti. Partner institution: Waseda University (supervisor: Prof. Kono Kimiko).
a.a 2014-2018　Università degli Studi di Firenze, Dipartimento di Lingue Letterature e Studi Interculturali. Hired professor for modern Japanese language.
a.a 2013-2018　Università di Venezia "Ca' Foscari", Department of Asian and North African Studies. Hired professor for modern Japanese language.

【論文】

- 「投企する文学遺産 有形と無形を再考して」『古典の未来学 Projecting Classicism』(2020), Tokyo, Bungaku-Report, pp. 613-625 (ISBN 978-4-909658-39-5)
- *The Heian Court Poetry as World Literature. From the Point of View of Early Italian Poetry* (2014), Firenze University Press.

【題目】

「イタリアから見たコロナ禍と日本研究― 明らかになった限界と可能性について」

【要旨】

ヨーロッパ各国の中で、イタリアは一番早くコロナウイルスの直撃した国だった。2020年3月9日から一ヶ月、完全なロックダウンが続いた間、薬局やスーパー以外の商店と企業はほとんど全て強制停止になるとともに、危険な感染クラスターとして疑われていた学校と大学の校舎が閉館し、教官たちには突然リモート授業を始めるという新しい義務がつけられた。ヴェネツィア・カフォスカリ大学はその頃、春学期の真ん中で、急な授業形式の変化を行なった。ロックダウンが解除された後も、授業も、6月と8月の試験も、また卒業式などもオンライン形式で行われ続けた。毎年9月に開催するイタリア日本学会は、その40年以上の歴史で初めてオンライン学会として行われ、イタリアの日本研究に取り込んでいる学者や学生たちにおいては、直接に集まってディスカッションできる貴重な空間が少なくとも圧縮された。その頃はすでに、世界中の学会やシンポジウム、また大学の講義などはほとんど全てオンライン形式に変わっており、直接に教室で接し合うことはこんなに大事だったかと、誰でも痛感しただろう。特に、日本への留学がしばらく許されなかった学生たちにとっては、実に失われた1年間として感じられたに違いない。一方、日本でも大学や研究機構は学会やシンポジウムをオンラインで行うことになったおかげで、海外からの参加者の急増というベネフィットを享受した。発表者の研究もその良い影響を受けたので、本発表ではその個人的な経験を踏まえながら新しい国際日本研究の可能性について論じたい。

【12/12（土）パネル発表　パネリスト】

佐藤＝ロスベアグ・ナナ
（ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院言語文化学部長）

【専門】

History of Translation Studies in Japan
Intergeneric translations (manga to film)
Translation of oral narratives or orality
Cultural translation
The relationship between translation and power

【学歴・学位】

2007 年 3 月　立命館大学大学院先端総合学術研究科博士課程先端総合学術専攻　修了

【職歴】

北京清華大学外国語学部講師、立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラル研究員、イースト・アングリア大学 University of East Anglia 言語コミュニケーション学科講師を経て、2014 年 9 月よりロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 SOAS, University of London 言語文化学部准教授。現在、言語文化学部学部長、翻訳研究所所長 Chair of the SOAS Centre for Translation Studies を務める。2008-10 年ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ University College London (UCL) 異文化間研究所客員研究員・講師、2010 年 Translation Research Summer School 教員スタッフ。2015 年より International Association for Translation and Intercultural Studies（IATIS）理事会メンバー、2018 年より同学会の Training Committee の長を務めている。

【著書】

- 学問としての翻訳：『季刊翻訳』『翻訳の世界』とその時代（みすず書房、2020 年）
- 文化を翻訳する：知里真志保のアイヌ神謡訳における創造（サッポロ堂書店、2011 年）

【題目】

「**Covid-19** 禍における大学教育と研究――現状と今後」

【要旨】

本発表においては、まず、私が現在行っている研究に関して簡単に説明をする。私の研究専門領域は Translation Studies であり、それも日本と東アジアという地域を対象にしている。イギリス在住であるため、Covid-19 の感染が拡大し、日本への渡航が難しくなり、研究を行うことそのものが困難になっているという現状がある。Covid-19 は、いわゆるフィールド研究ができないという状況を多くの研究者にもたらしたのである。しかし、人間にも環境変化に対する適応力が備わっている。この状況を逆手にとって、現在、私と同僚たちがどのような研究プロジェクトを共に進めているのかを紹介してみたい＊。

さて、Covid-19 の世界的大流行を受けて、イギリスの大学機関はその教育の在り方の変更を余儀なくさせられた。かなりの短期間のうちに大きな変革を迫られたイギリスの、とりわけ地域研究を専門とする SOAS（ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院）の大学教育や研究方法は今後どのように展開していくのだろうか。この問いを今回のヨーロッパ日本研究学術交流会議のテーマである「緊急会議 After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」と結びつけ、現状を概観したのちに未来図を提供してみたい。

＊本発表で言及する研究プロジェクトは UKRI/AHRC の Covid-19 Project 助成金を受けています。[助成金番号 AH/V013769/1]

【12/12（土）パネル発表　パネリスト】

鋳物　美佳（いもの　みか）

（ストラスブール大学外国語学部専任講師）

【専門】

哲学（メーヌ･ド･ビラン、西田幾多郎、中動態、身体表現、武道、舞踊、稽古 、習慣、意志）

【学歴･学位】

2009 年 11 月 - 2013 年 06 月　トゥールーズ第二大学 哲学研究科　修了
2009 年 04 月 - 2015 年 03 月　同志社大学 文学研究科 哲学専攻　修了

【職歴】

2013 年 09 月 - 2015 年 08 月　ボルドー･モンテーニュ大学 外国語学部 専任講師
2015 年 09 月 - 2017 年 08 月　ストラスブール大学 外国語学部 特任助教
2017 年 09 月 - 2019 年 08 月　ストラスブール大学 外国語学部 専任講師
2019 年 09 月 - 2020 年 08 月　国際日本文化研究センター 外来研究員
2020 年 09 月 - 現在　ストラスブール大学 外国語学部 専任講師

【著書】

『運動する身体の哲学』（萌書房　2018 年 8 月）

【題目】

「コロナ禍における見えるものと見えないもの」

【要旨】

この文章を書いているのは 10 月 31 日。フランスでは、全国的な再ロックダウンが始まった翌日である。1 週間前に思い描いていた当たり前は、当たり前ではなくなってしまった。めまぐるしく様相を変えていくコロナ禍は、人間を近視的にしてしまい、思考にはすべて日付がつく。

カンファレンスの日までの 1 ヶ月強の時間が、とても長いものに思えてしまう。アフターコロナは夢見ることさえできない。長いウィズコロナの、今がどの段階にいるのかも皆目見当がつかない。ただ悲愴感はあまりなくて、人生は続いていく、としか言いようがない毎日。

私は 2020 年 8 月に日本からフランスに移動する機会を得たおかげで、幸いにも、コロナ禍にある二つの国を知ることができた。コロナへの集団的な対策はひとつの型と考えることができる。本報告では、フランスでの現状を紹介しつつ、型のもつ様々な局面をヒントに、コロナ禍において見えるものと見えないものを、可能なかぎり考察してみたい（と、現時点では考えている）。

【12/12（土）パネル発表　パネリスト】

アンドレアス・ニーハウス
（ゲント大学芸術・哲学部教授）

【専門】

Japanese sport history and sport sociology
Body culture of early-modern and modern Japan
Cultural and national identities
Biography and body
Birds

【学歴・学位】

2002	Finishing doctoral thesis. Title: Leben und Werk Kanō Jigorōs. Ein Forschungsbeitrag zur Leibeserziehung und zum Sport in Japan
1998 - 1999	One year visiting scholar (*hōmon kenkyūin*) at Keio University, supporting professor: Komuro Masamichi; 6 months supported by a DAAD-scholarship
1997	Doctoral course at Cologne University (Japanese Studies, Sport History)
1997	University graduation. M.A. at Cologne University

【職歴】

2017	Member of the EAJS Council as local organizer of the 2020 EAJS Conference in Ghent
2015	Appointed Head of International Office Faculty of Arts and Philosophy; Appointed Collaborative professor Kanazawa University
2014 ~ Present	Full professor, Faculty of Arts and Philosophy
2012 ~ 2018	Head of the Department Cultures and Languages (formed in 2012, about 110 staff members)
2011 ~	Adjunct Professor for Japanese at the University of Eastern Finland
2010 ~ 2012	Head of the Department of South and East Asian Cultures and Languages
2007	Tenured position at Ghent University
2004	Appointment as “docent” at Ghent University, Head of the Institute for Japanese Culture and Language (tenure)
2003 ~ 2004	Academic assistant at the Institute of East Asian Studies, Department of Japanese Studies, Cologne

【著書】

Niehaus, Andreas: *Leben und Werk Kanô Jigorôs. Judo - Sport - Erziehung*. Würzburg: Ergon Verlag 2019 (=Sport, Kultur und Gesellschaft, 6; third extended and revised edition)

【題目】

「面目を改める**?**　新型コロナウイルスとベルギーにおける日本学の現在と将来」

【要旨】

今度はベルギーにおける日本研究と、コロナ危機がベルギーの大学に与えた影響について、お話しさせていただきます。わがゲント大学に焦点を当て、私たちが危機にどのように対処したか、またコロナ危機が教育や研究、今後の活動にどのような影響を与えたのかを、お話ししようと思います。

コロナ危機は実に広範囲にわたるジレンマを私たちに突きつけ、見直しを迫りますが、特に日本研究のような国際的なプログラムにおいてはこの傾向が顕著です。一番申し上げたいのは、私たちはコロナ以前の日常への回帰を望むべきではないということです。現在のウイルスが最後のウイルスになるわけではありませんし。杉田玄白は「面目を改める」という言葉を使って、全く異なる視点から見直すという新しい手法を説明しました。私たちも教え方、学び方、伝え方、研究の仕方を根本的に見直す時期に来ているのかもしれません。

【12/12（土）パネル発表　パネリスト】

マルクス・リュッターマン
（国際日本文化研究センター教授）

【専門】

日本中世社会史（古文書学、文化史学）・記号論・心性史・言動史

【学歴・学位】

2002	フンボルト大学 日本学教授資格（ハビリタチョーン）　取得
1995	ハンブルク大学 博士号　取得
1993	大阪市立大学 大学院文学研究科　研修生として留学
1992	ハンブルク大学 修士学位　取得

【職歴】

2017	国際日本文化研究センター 教授
2007	国際日本文化研究センター 准教授
2002	国際日本文化研究センター 助教授
1996	フンボルト大学 研究アシスタント

【著書】

Schreib-Riten (shorei 書礼) Untersuchungen zur Geschichte der japanischen Briefetikette, Teilband 1: Theorie und Überlieferung ; Teilband 2: Rhetorik ; Teilband 3: Nonverbalität und Intermedialität (Izumi: Quellen, Studien und Materialien zur Kultur Japans / herausgegeben von Klaus Kracht; Band 14; Teilbde. 14.1-14.3). , Harrassowitz Verlag., Wiesbaden, 2011 (『「書礼」日本書簡作法の史的研究』、Harrassowitz Verlag.、ヴィスバーデン市、2011 年)

【題目】

「日本語圏における『良心形成』の学際研究」

【要旨】

古来から資源をめぐる戦争、開発、都市化などの各々の環境問題に面し、疫病などの作用ももたらす経緯がある。そこには常に我欲と良心とが拮抗している。

さて、日本語圏で「良心」と表される概念は、孟子など中国思想を大きな源流とし、近代にはヘレニズムやキリスト教文化の流れも汲んで形成されて来た。仁義／synteresis／conscientia／Gewissen などの訳語として「良心」が適切かという問題、また、我々の良心概念が人類に普遍的であるかも疑う余地がある。仮に「普遍性のある良心なる理念」があるとすれば、その根幹は善悪・是非を分別する能力に求められるであろう。善悪の判断能力には究極では良い方向性もあり、最善という目標も欠かせないと思われる。また抽象レベルでは普遍性を謳えたとしても、その具体的内容には異質なものも顕在化し、変遷してきた。

この経緯を伝える記号として例えば「規範」がある。しかし規範そのものに混乱と矛盾が内在する一方、それを破る／守れない場面においての心情（良心の呵責）が個人的にも集団的にも定着し、緊張感を起す。罪、恥、思い煩いなど多様に表現されるこの心情の有様と呼応するように、禊、懺悔、反省などそれを癒すための理念や行動も多彩に伝わっている。

多種のテキストを分析し、古今の日本語表現界における規範群や、気が咎める場面における表情、そして反省の表現を収集・整理し、他の言語圏や表現界と比較することで、人間文化に対する新たな認識を得られるであろうか。

【12/12（土）パネル発表　ディスカッサント】

白石　恵理（しらいし　えり）
（国際日本文化研究センター助教）

【専門】

日本美術史

【学歴・学位】

2005 年 03 月　北海道大学大学院 文学研究科哲学専攻　博士課程単位取得退学
1998 年 12 月　ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）美術史・考古学研究科
修士課程修了

【職歴】

2017 年 10 月　国際日本文化研究センター 総合情報発信室 助教
2016 年 09 月　京都大学人文科学研究所 教務補佐員
2009 年 04 月　国際日本文化研究センター 出版編集プロジェクト員

【共編著】

坪井秀人・瀧井一博・小田龍哉と共編『越境する歴史学と世界文学』臨川書店、2020 年

坪井秀人・小田龍哉 と共編『日本研究をひらく―「国際日本研究」コンソーシアム記録集 2018』晃洋書房、2019 年

パトリシア・フィスター監修、リン・リッグスと共編　*Reevaluating Translation as a Driving Force of Scholarship*（国際シンポジウム「翻訳の再評価:学問を深める原動力」報告書）国際日本文化研究センター、2019 年

郭南燕と共編『世界の日本研究 2015―「日本研究」を通じて人文科学を考える』国際日本文化研究センター、2016 年

【論文】

「明治期キリシタン版画にみる日本文化の表象」『DNP 文化振興財団学術研究助成紀要』Vol. 3（2020 年予定）

「見立てと写しのアイヌ戯画―メディアとしての〈夷酋列像〉」稲賀繁美編『映しと移ろい―文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社、2019 年

「第四章　ド・ロ版画にみる日本イメーシの受容と展開」郭南燕編著『ド・ロ版画の旅―ヨーロッパから上海～長崎への多文化的融合』創樹社美術出版、2019 年

「蠣崎波響の絵画資料―画稿にみる同時代画人との交流―」『鹿島美術研究』年報第 20 号別冊（2003 年 11 月）

「蠣崎波響画業考―円山四条派の受容をめぐって―」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』創刊号（2001 年 12 月）

【12/13（日）パネル発表　パネリスト】

アラン・カミングス

（ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院東アジア言語文化学部上級講師）

【専門】

Early modern Japanese theatre and literature

【学歴・学位】

1998 – 2010	Ph.D., School of Oriental and African Studies, University of London
1995 – 1998	MA Japanese drama, Waseda University
1989 – 1995	BA Japanese, School of Oriental and African Studies, University of London

【職歴】

School of Oriental and Afriacn Studies, University of London

2019 – Present	Senior Lecturer
2008 – 2019	Senior Teaching Fellow
2007 – 2008	Teaching Fellow
2001 – 2006	Lecturer in Japanese Literature
1999 – 2001	Teaching Fellow

【著書】 *Haiku: Love*. (2013) London: The British Museum Press.

【題目】

「Research on the impact of Covid-19 on Japanese performing arts & music」

【要旨】

My own research to date has generally focussed on Japanese traditional performing arts, particularly kabuki, and contemporary experimental music. As the current situation with the pandemic makes travel to Japan unlikely in the near future, other avenues must be considered for exploration.

I have several projects that are currently in their initial stages. The first of these is to consider more broadly the depiction and effect of illness on the kabuki stage, both in terms of dramatic narratives which frequently make use of illness as an important plot point, whether in terms of a character's illness or disability which can become the impetus behind a change in social status (*yatsushi*) or the quest for some valuable object or elixir to cure the illness. It has also made me question the ways in which premodern theatre dealt with previous pandemics, both in practical and imaginary terms.

My second project revolves around the question of intimacy and sociability in relation to musical performance. The need for social distancing has meant that musical performances during the pandemic have continued but with much smaller (or none) in-person audiences but with a potential global audience through live-streaming. I am interested in exploring further both how musicians have reacted to this lack of an in-person audience and how it has shaped performance approaches, but also how audiences have experienced the virtual intimacy created through the streaming technology.

【12/13（日）パネル発表　パネリスト】

豊沢　信子（とよさわ　のぶこ）

（チェコ科学アカデミー東洋研究所研究員）

【専門】

Cultural and intellectual history of modern Japan

【学歴･学位】

2000 ~ 2008	Ph.D. program in the Department of East Asian Languages and Cultures, University of Illinois, Urbana-Champaign.
1998 ~ 2000	M.A. in the Department of East Asian Languages and Cultures, University of Illinois, Urbana-Champaign

【職歴】

2017 ~ Present	Research Fellow in the Oriental Institute of the Czech Academy of Sciences.
2013 ~ 2016	Postdoctoral Fellow in Early Modern Japanese Studies, Department of East Asian Languages and Civilizations, The University of Chicago.
2012 ~ 2013	Teaching Fellow in Japanese History, School of History, Classics and Archaeology, Newcastle University, UK.
2011 ~ 2012	Research Scholar, History Department, University of Southern California.
2009 ~ 2011	Andrew Mellon Teaching Postdoctoral Fellow, Department of History, USC.
2008 ~ 2009	Visiting Scholar, Department of History, USC.

【著書】

2019. *Imaginative Mapping: Landscape and Japanese Identity in the Tokugawa and Meiji Eras*. Harvard University Asia Center.

【題目】

「In Response to COVID-19—Some Preliminary Thoughts about the Future from the Czech Republic」

【要旨】

This presentation offers an overview of the current conditions of research and education affected by COVID-19 through the experiences of major universities and research institutions in the Czech Republic. It first discusses a series of changes that were forced into general learning and production of knowledge since the emergence of COVID-19 in the region (around March 2020). Understandably, the future course of events remains unpredictable, but it tries to address what we, the researchers of Japanese Studies, can do not only to survive this uneasy time but also to strengthen the field by uniting and collaborating with scholars of Japanese Studies throughout the world. Then, it touches upon the discussion that is dominating many disciplines in Humanities and Social Sciences right now for drastic measures to remodel the way field-based sciences are taught, conducted, and funded. The claim for not waiting for a “return to normal” but accepting “new normal” and, furthermore, enabling transformations in respective fields of study is well-taken. However, this paper focuses more on the opportunities that rose as a result of COVID-19, and considers how we can implement them as changes and reforms to our existing research and learning environment.

【12/13（日）パネル発表　パネリスト】

梅村　裕子（うめむら　ゆうこ）

（ブダペスト大学 [ELTE] 人文学部日本学科長）

【専門】
ハンガリー史・日洪交流史

【学歴・学位】

1982 年 3 月	桐朋学園大学大学音楽学部演奏学科卒業
1982 年 9 月～1986 年 5 月	リスト音楽院及びブダペスト大学大学院研究科にハンガリー政府奨学金留学生として在籍　単位取得
1998 年 9 月～2003 年 5 月	ブダペスト大学人文学部大学院歴史学専攻
2004 年	最高位の評価にて歴史学博士の学位取得
2015 年	教授昇進資格取得（Doktor Habilitation）

【職歴】

1993 年～1995 年	在ハンガリー日本大使館政務担当専門調査員
2000 年～	ブダペスト大学人文学部日本学科　講師
2004 年～	同学術研究員
2006 年～	同助教授
2019 年～	同准教授・日本学科長

【著書等】

- 『日本とハンガリーの相互認識』（単著）ブダペスト、アカデミア社　2017 年
- 『日本海からドナウ河畔へ』（単著）ブダペスト、ゴンドラト社 2006 年
- 『ハンガリー・日本関係史論集』（共著）「戦前の日本におけるハンガリー認識」「1938 年の日洪文化協定」「日本における 1956 年ハンガリー動乱の認識」「日本におけるハンガリー民族舞踊」ブダペスト、エトベシュ社 2009 年
- 『浮世絵-ヴァイ・ペーテルの版画コレクションより』（共著）「ハンガリー人の目に映った戦前の日本－古い日本学の書籍を紐解いてみると－」ブダペスト、ホップ・フェレンツ美術館　2010 年
- 「小説『佳人の奇遇』におけるコシュートの役割」『ウラリカ』日本ウラル学会 2018 年 17 号
- 「知られざるエピソードで綴る明治日本とハンガリーの交流史」『神園』明治神宮国際神道文化研究所　2015 年第 13 号
- 「今岡十一郎の活動を通して観る日本・ハンガリー外交関係の変遷」『国際関係論叢』東京外国語大学国際関係研究所　2013 年第二巻第二号

【題目】

「ブダペスト大学における日本学研究の現状、及び感染症に対する取り組み」

【要旨】

ブダペスト大学の日本学科は比較的歴史があり、また人気学科として学生の応募も多い。様々なテーマで日本学の研究が行われている。私自身は日本・ハンガリー関係史を主に研究していて、現在は第一次大戦の和平における日本の役割とその意義につき調査している。学内共同プロジェクトとしては「家族と伝統—時代の変遷と現況」といったテーマで当校東アジア研究所全体が参加する研究を行っている。博士課程テーマの傾向としては、伝統的な文献研究より最近はもっと広く学際的になってきている。一方、日本学研究者による国際的な共同研究というのはそれほど進んでいない。今は大学間協定で留学生を送ることなどが主な交流活動である。他は国際交流基金が主催する近隣諸国の研究者が参加する会議や院生の発表会、論文集の発行などが盛んだ。

感染症に関して、当校ではまず授業や試験を滞りなく進めていくことに重点が置かれた。比較的スムーズにリモートへ移行し、支障は最小限に抑えられ、営みを続けていくという点ではうまく機能していたと言える。現在はオンラインと対面を半々で実施し、出来るだけ以前の形態を保持するよう努めている。研究活動において、多くが集う会議や国境を越えての移動は極力制限されていて、止まっている案件も多いし、まだ今後については模索中である。

【12/13（日）パネル発表　パネリスト】

ビョーン＝オーレ・カム
（京都大学大学院文学研究科講師）

【専門】
メディア利用論、ポピュラー・メディア、非デジタル・ロールプレイング・ゲーム（RPG）、ライブ・アクション・ロールプレイ（LARP）、文化伝達、パフォーマティビティ、物質的記号学、サイバー人類学

【学歴・学位】

2011 ~ 2015	ハイデルベルグ大学カール・ヤスパース・センター大学院　日本研究学科博士課程
2010	ドイツ日本研究所博士課程奨学生
2008	ライプチッヒ大学修了（修士）
2005 ~ 2006	立命館大学へ留学
2002	ライプチッヒ大学日本研究学科・メディア研究学科修士課程入学

【職歴】

2017 ~	京都大学文学研究科文化越境専攻講師
2015 ~ 2017	京都大学特定講師
2013 ~ 2015	ハイデルベルグ大学亜欧文化交流研究所での大学院教員（講師）
2012 ~ 2013	京都大学「親密圏と公共圏の再編成」グローバル COE での研究員
2011 ~ 2012	ハイデルベルグ大学亜欧文化交流研究所での研究員／研究分野コーディネーター（URA）

【著書等】

- Kamm, Björn-Ole. 2019. Experience Design for Understanding Social Withdrawal: Employing a Live-Action Role-Play (LARP) to Learn About and Empathize with Hikikomori in Japan. In Neo-Simulation and Gaming toward Active Learning, edited by Hamada et al., 387–396. Singapore: Springer.
- ——. 2019. Adapting Live-Action Role-Play in Japan—How German ‘Roots’ Do Not Destine Japanese ‘Routes.’ Replaying Japan, no. 1: 64–78.
- ——. 2020. Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings. New York: Palgrave MacMillan.

【題目】

「Methodological Concerns of Researching Larp and Educational Roleplay in Japan: The (Im) Possibilities of Remote Fieldwork」

【要旨】

My research engages live-action role-play, larp, in two different ways: From a transcultural studies and Japanese studies perspective, I am studying how related practices evolve and change in Japan, how communities emerge around these practices, and how people adapt larp to their own environment. As an educator, I am exploring larp from a methodological perspective for the purpose of translating research findings into an experienceable form. For the latter endeavor, I am currently working on a project that seeks to translate the challenges and worldviews of people diagnosed with autism into a larp so that others may gain a first-hand glimpse into their life-worlds.

Larps are a combination of gaming, improv-theater-like character improvisation, and shared storytelling. A facilitator creates a scenario and the players explore this through their characters. Most larps are for entertainment purposes but if they are used in education, they usually have long pre- and post-play workshops to offer time for reflection.

Both avenues of my research, larp as a hobby in Japan and larp as a research tool, have been severely impacted by the effects of the corona virus on travel and face-to-face interaction. Design workshops with colleagues in Germany for the larp about autism had to be cancelled or postponed. We are now exploring online alternatives. This matches the approach of larp practitioners who try out various forms of remote gaming – however, in both cases these approaches have limits. In this presentation, I will discuss these possibilities and limits of remote fieldwork and research when it comes to larp practices in Japan.

【12/13（日）パネル発表　ディスカッサント】

キリ・パラモア
（ユニバーシティ・カレッジ・コーク東アジア学部教授）

【専門】

Intellectual histories of Confucianism, Christianity and liberalism in East Asia

【学歴・学位】

2006　Ph.D. in intellectual history, the University of Tokyo
2003　M.A. in intellectual history, the University of Tokyo
1999　Hons. in Asian Studies and Asian History, the Australian National University
1997　B.A.S. in Asian Studies and Asian History, the Australian National University

【職歴】

2019 ~ Present　Professor of Asian Studies in the National University of Ireland, University College Cork
2007 ~ 2019　University Lecturer in Japanese History at Leiden University

【著書】

Kiri Paramore (2016) *Japanese Confucianism: A Cultural History*. Cambridge: Cambridge University Press.
Kiri Paramore (2009) *Ideology and Christianity in Japan*. London: Routledge.

【12/13（日）パネル発表　ディスカッサント】

藤本　憲正　（ふじもと　のりまさ）
（国際日本文化研究センター機関研究員）

【専門】

キリスト教思想・宗教学

【学歴・学位】

2008　早稲田大学 政治経済学部 政治学科　卒業
2012　同志社大学大学院 神学研究科 博士前期課程　修了
2018　同志社大学大学院 神学研究科 博士後期課程　修了

【職歴】

2019 ~　国際日本文化研究センター 機関研究員

【論文】

2019　ポール・F・ニッターの宗教間対話に関する一考察（基督教研究 81(2) pp. 81 – 92）
2018　'The Problem of the Interreligious Playing in the Grief Care' (*International Conference on Values in Religion* 6 pp. 85 - 92)